

「富山に伝わる三つの民謡」について

尾崎徹

この民謡集は、富山県出身で昨年9月に90歳で他界した岩河三郎が、無形文化財にもなっている三つの民謡を、ピアノまたはオーケストラをバックに混声合唱のために構成・作曲した交響詩的趣を持った壮大な組曲で、1979年に初演されて以来、ふるさとと合唱を愛する人々に30年以上に亘り歌い継がれている作品である。

民謡の旋律にロマンティックでやや物憂いオリジナルのメロディを挟みつつ、曲の最後は民謡の節で閉じるという手法がとられていて、一般的な編曲民謡とは一味違った、歌手と聴き手を飽きさせない工夫がなされている。三曲は時系的に晩夏から冬、そして春を迎える時節の流れをつくり、越中富山での人々の暮らしぶりと冬の厳しさを思い起こさせる。そしてこれらの旋律自体からは、派手さは無いものの、心にジワリと滲みってくる強かさが感じられる。

一方、遙か昔から歌い継がれてきたオリジナルの民謡にはそれぞれ踊りや楽器を伴っており、それらが華やかさを添えている。越中おわら〔おわら節〕とむぎや〔麦や節〕は、他の民謡演奏には見られない鼓弓という二弦楽器が使用されていることで、ある種大陸的な情緒さえ感じられるし、2曲目のこきりこー日本で一番古い民謡とされる〔こきりこ節〕一は、竹を七寸五分（約23cm）に切って叩く小切子や、ささら（小さな桧板を紐で108枚重ね、頭上で半円を描いてずらすように叩く）或いは「デデレコデン」と聞こえる小太鼓などの楽器が使われており、小規模な楽団が踊りを伴って演奏する一つの華やかな演目としても人々を楽しませながら伝承されてきた。

三曲は、それぞれ祈り歌、田楽、労働歌という別の流れを汲んでいるものの、「こきりこ」と「むぎや」については平家の落人伝説に大きく関連しているところは興味深い。その伝説に拠れば、倶利伽羅峠の戦いで木曾義仲に敗れた平家の末裔が五箇山に隠れ住んで、弓や刀を鎌や鍬に持ち替えて麦や菜種を栽培し暮らしたとも言い伝えられている。一戦い続けた平家がその後、壇ノ浦の合戦にも敗れ、南走平家として沖縄に渡ったという伝説はまた興味深い――

しかし近代で一番良く知られている「こきりこ」が、実は廃れる寸前に西条八十によって掘り起こされ芸能楽曲として広められたものであることは良く知られた話であり、他の2曲も同様にそれぞれ様々な運命を辿って今日の人々の心に息づいているのである。

それぞれの民謡の成り立ちなどはWebで検索すれば山ほど出てくるので、この編曲に基づく各曲の構成などを次に探してみたい。

◆越中おわら

管弦楽曲のプロローグのように、壮大な物語を予感させる旋律が富山の山々の勇壮さを表している。やがて合掌造りに象徴されるような祈りのテーマに変わり、人と自然との融合を、或いは厳しい自然に溶け込もうとする人々の暮らしぶりが表現される。テーマは再び大自然に溶け込み、人々の祈りの声が聞こえ始める。

風の盆で踊られる男踊りと女踊りが交差するように男声と女声が別々に織り成す祈り歌がオリジナルテーマで歌われたあと、いよいよ「おわら節」がテンポ良く飛び出してくる。実際この民謡謡いの難関とも言うべきハイトーンがテナーパートに当てがわれ、他パートのお囃子を受けて小気味良く進んでいく。また、この民謡のもう一つの特徴でもある7・7・7・5の歌詞に「オワラ」と掛け声を挟むパターンが次の節をうまく引き出す。風の盆は夜が更けても三日三晩踊り続ける。一旦去ったあとに次の連が近づいて、また大合唱となって曲を終える。

◆こきりこ

五箇山の里がすっかり雪に覆われ、まだまだ降り続く雪が「こきりこ」の歌を導いてくる。歌は次第にハッキリ聞こえてきて、平家の落武者達が想いを馳せながら山々を駆け巡る。途中、吉田兼好の「徒然草」冒頭の言葉を引き合いに、その随筆中に紹介される平家物語を掛けて、落人のため息の調べが哀愁を帯びる。

再びお囃子—「窓の棧」に「晴れの燦」をうまく掛けている—が広がり、太鼓も加わって華やかに曲が閉じられる。

原曲では「デレレコデン」の箇所では1拍目の強拍が暫く弱拍と入れ替わり、ロックのようなビートになるのも面白く、その雰囲気編曲にも生かされている。

◆むぎや

わらべ歌のようなピアノの旋律が雪人形の歌を導く。ふと紋弥爺さんが登場して山に向かって叫ぶ声が大きく木霊し立体的距離感を演出する。

時はやがて春、春を呼び込む掛け声が「むぎや」の旋律に変わる。

「♪麦や菜種は前の年に蒔いて次の春に刈るから二年越しだが、麻は春に蒔いても土用の頃には刈らねばならぬ♪」

もんやじいさんも浮かれて踊り出し、五箇山の春を讃えてフィナーレを迎える。

2014/08/23